αMプロジェクト2020-2021

約束の凝集
Halfway Happy

vol. 4 荒木悠
vol. 4 Yu Araki

ゲストキュレーター：長谷川新（インディペンデントキュレーター）
Guest Curator: Arata Hasegawa (Independent Curator)

2021年6月18日（金）〜9月22日（水） オープニングパーティ等はございません。
夏季休廊　8/1〜8/23
13:00〜20:00※　日月祝休　入場無料

会場：gallery αM
〒101-0031 東京都千代田区東神田1-2-11アガタ竹澤ビルB1F
tel：03-5829-9109　fax：03-5829-9166
https://gallery-alpham.com

協力：荒木悠　LetrA　CASAMATERA　Studio Antani

写真：Silvana Spada

※新型コロナウイルスの影響により、開催日時の変更や入場制限、ご連絡先の記入等へのご協力をお願いする場合がございます。
緊急事態宣言期間中は開廊時間を12:00〜18:00に変更しております。今後も変更の予定がございますので、最新情報をWebおよびSNSでご確認ください。
またご来廊の際には、必ずマスクをご着用いただき、体調の優れない方はご来廊をお控えくださいますようお願い申し上げます。

■取材、掲載用写真の貸出など、ご質問がございましたら下記までお問い合わせ下さい。■

gallery αM ギャラリーアルファエム　e-mail: alpham@musabi.ac.jp ／ tel：03-5829-9109 ／ fax：03-5829-9166
武蔵野美術大学 大学企画グループ 社会連携チーム（ギャラリー不在時）　tel：042-342-7945 ／ fax：042-342-6087

αM プロジェクト 2020–2021「約束の凝集」第 4 回は荒木悠の個展である。タイトルはない。

本展は、2009 年ごろの過去作から、未発表作、最新作にいたるまで、荒木悠が撮影した映像を中心に構成される。

……荒木さん、さすがに短すぎませんか。これプレスリリースですよ。え、これくらいでいい？　みんなポカンってしますよ。ポカンでいい？　そうですか。同じポカンなら、良きポカンを目指したいですね。タイトルを最後に決めようって言ったのはキュレーターじゃないかって、まあそうなんですけど、まさか無題にするって言われるとは思ってなかったです。ちなみに、もしタイトルをつけるとしたらどうしますか？

「イメージ・チェンジ」。

あーそれはいいですね。でも無題なんだ（笑）。

というわけで、本展は荒木悠の個展である。以下、２点補足を設ける。

【補足１】
展覧会メインビジュアルとなっているのは、「約束の凝集」ポスターおよびフライヤーと同様、イタリアの洞窟住居都市マテーラで撮影されたものである。2019 年にレジデンスに招かれた荒木は現地で制作を試みたが、あまりにもうまく行き過ぎたために（つまり構想したイメージと実際のイメージがあまりにも一致していたために）納得がいかなかったという。本展企画者も荒木に構想ドローイングを見せてもらったが、見事なほど実際に撮影された写真そのままであり苦笑してしまった。なお、来場者はメインビジュアルと対になるイメージが印刷されたポストカードを受け取ることができる。

【補足２】
荒木悠の作品は、多くの場合、さまざまな協力者なしには成立しえない。近年の荒木の制作は監督業的な側面も強く、出演、撮影、録音、照明、小道具などを他者に委託したかたちで行われている。今回の新作では、荒木は撮影にも立ち会わず、編集をも手放し、一切を他者に委ねた作品を「制作」した。これが「怠慢」や「効率化」では断じてないことは想像すれば了解いただけるだろうと思う。関係者全員がスリル満点の日々を過ごした。撮影、編集を奥祐司が、コーディネートを本展企画者が務めた。当該作品についてはとりわけ荒木悠氏の尽力があったことを特筆しなければならない。記して感謝する。

ご高覧のほど、よろしくお願い申し上げます。

長谷川新（インディペンデントキュレーター）

●荒木 悠(あらき・ゆう)
1985年生まれ。大学で彫刻を、大学院では映像を学ぶ。主な個展に「三泊五日」板室温泉 大黒屋 (栃木、2021)、「RUSH HOUR」CAI02 (北海道、2019)、「ニッポンノミヤゲ」資生堂ギャラリー(東京、2019)、「双殻綱:第一幕」無人島プロダクション(東京、2017)、「複製神殿」横浜美術館アートギャラリー1/Café小倉山 (神奈川、2016)。近年の主なグループ展に「Returning: Chapter 1」シドニー・オペラハウス(シドニー、2021)、「Connections— 海を越える憧れ、日本とフランスの150年」ポーラ美術館(神奈川、2020)、「The Island of the Colorblind」アートソンジェ・センター(ソウル、2019)など。第5回Future Generation Art Prizeファイナリスト。

荒木悠
《LOST HIGHWAY (SWEDED)》
2018 年|映像インスタレーション
ボルボ スタジオ青山での展示風景

荒木悠
《双殻綱》
2019 年|映像インスタレーション
ピンチューク・アートセンターでの展示風景

荒木悠
《The Last Ball》
2019 年|映像インスタレーション
資生堂ギャラリーでの展示風景
撮影=加藤健

キュレーターズノート (2020.1.16) 長谷川新

2018年の暮れ、「αMでゲストキュレーターをしませんか」と連絡をうけて最初に考えたことは、「絶滅」についての展覧会だった。風の谷のナウシカの原作漫画を繰り返し読んでいて、タイトルは仮で「ノーマンズランド」とつけていた。それはとても暗いように見えるけれど、別に悲観的であるわけではなくて、むしろそれを避けてアートはできないんじゃないか、という中途半端にリアルな手応えに基づいたものだった。他方で、できるだけ具体的であろうとも考えていて、開場時間を13時〜20時へと変更したり、初日のアーティストトーク(とその文字起こし)をやめてカタログをもっといろんな読み方ができるようにしようとか、オリンピックシーズンの鑑賞/労働条件を鑑みて、展示はせずに別の時間の使い方ができるようにしよう、と決めたりもしていた。このちぐはぐさはなんなのだろう、と自分でもよくわからなかった。でもいまははっきり書けることがある。

各位が培ってきた技術は、「妥協」のために、つまりは部分的であったり矮小化されて行使されるべきではない。アートは、「アートなんて無意味だ」とか「どうせいつか死ぬ」とかいう地点にたどり着いてしまってから、むしろそこから、そこをどう折り返して、還ってくるか、という、いわば「帰還の技術」の連続である。虚無と相対化の荒野は、到達地点であったとしても、目的地では決してない。無意味かもしれない、けど、やりたいんだ、と踵を返す。

妥協を「約束の凝集(Com-Promise)」として、途方もなく前向きに考える。それが妥協ではなく約束の凝集である限り、そこには未来の時間が含まれている。今回のαMは、5人のアーティストが、自分が生きて死ぬ時代に、それぞれのやり方で、未来を確信する技術の、研鑽と共有です。

追記(2020.7.29)
半年前のキュレーターズノートを見返すと隔世の感があります(恥ずかしいですがそのまま再掲します)。それでも、「はっきり書ける」と書いた部分は今でもはっきり書けます。「約束の凝集」には、確信もあれば、矛盾もあります。アーティストの実践は社会と同じくらい複雑だし、社会はアートと同じくらい吹っ切れている。そういう潔さを心がけたい。でもそれ自体を見せたいわけじゃなく、問われているのはあくまで、どう還ってくるか、です。5人のアーティストの「帰還の技術」を目撃しにきてください。